

大倭と山背

——一つの素描——

杉崎重遠

一

大和と山城とは隣り合つた国々であるが、これらの国々に住む人々がお互に相手の国に住む人々に対してどんな感情を持つて接してゐたであらうか。これは興味のある問題であるが、ここには大和を中心にして考へて見たいと思ふ。

一体、今、我々が大和なり山城なりといふ文字で記してゐるこれらの国々は最初からこの名で呼ばれてゐたのではない。試みに古書を抜いて見るに、大和については、

記Ⅱ倭・大倭。

紀Ⅱ大倭。

統紀Ⅱ大倭。

等の文字が使用されてゐる。但し、統紀に換ると、天平九年（七三七）十二月廿七日に大養徳国と改められてゐるが、同十九年（七四七）三月十六日に大倭国に復されたことが教へられる。但し、旧に復したこの称呼も永続したのではなく、天平宝字二年（七五八）までであつたらしい。といふのは、この年二月廿七日の条に、「大和国守從四位下大伴宿禰公」と記されてゐるからである。そして、

この記事以後は大和の文字で押し通してゐる。又、万葉集はどうかといふに、

也麻等・夜麻登・山跡・山常・日本・倭・和

等と数種の表現が見られるが、これらを一覧して見るに、一般的に大倭と表現してゐたのではなからうか。

一方、山城は如何かといふに、桓武天皇が平安京に遷都された際に山背を山城と改められたが、そのことは日本紀略の延暦十三年（七九四）十一月八日の条に見えてゐるので、それまでは山背を以て正式の呼称としてゐたことが分明となるであらう。そして、紀も亦山背を以て一貫してゐる。但し、記は山代を以て終始してゐる。又、万葉集には山背・山代・開木土代との三種の表現に従つてゐる。よつて、大観するに、山背に換る方が多いので、先に大和を大倭との表現で代表させたやうに、山城を山背と表現しておかう。

二

さて、大倭に住んでゐた人々と言つても、時処共に空漠としてゐて把握し難いので、地域的にはこれを國中即ち奈良平野又は奈良盆地と呼ばれてゐる地域に限定し、時間的にはこの國中の南部即ち飛

鳥地方を中心として代々の天皇がその宮を置かれた時期即ち大和時代と、平城に都が遷されてから山背の長岡に都が遷されるまでの時期即ち奈良時代との二大時期に区分しておかう。更にこの時处的に区分したものを仍細に見る時には、

一、前飛鳥時代

二、近江時代

三、後飛鳥時代

四、平城時代

の如く、区分することが出来るであらうが、ここに挙げた四つの時期については一応説明しておく必要があるであらう。即ち、

一、前飛鳥時代Ⅱ古代より天智天皇が近江大津宮へ都を遷されるまでの時期。

二、近江時代Ⅱ天智・弘文両天皇の御代で、改めて言ふまでもなく近江大津宮に都が所在してゐた時期。

三、後飛鳥時代Ⅱ壬申の乱後、天武天皇が飛鳥へ都を遷され、やがて飛鳥浄御原宮に坐し、次の持統天皇が藤原宮へ遷られ、文武天皇の御代を経て元明天皇の御代の初頭に奈良——平城へ都を遷されるまでの時期。

四、平城時代Ⅱ所謂奈良時代で、元明天皇の奈良遷都から桓武天皇の長岡遷都並に平安遷都まで、元明・元正・聖武・孝謙・淳仁・称徳・光仁・桓武等の諸天皇の御代に亘つてゐる時期。

となるであらう。このやうに四つの時期に区分して見たが、大倭の人々が山背の人々に抱く感情はそれぞれの時期に於いて親疎の差があつたのではなからうか。又、このやうに都の所在が飛鳥と平城とに別れてゐるので、古くは飛鳥の人々の感情、降つては奈良の人々

の感情と分けて考へなければならないであらう。

三

古代に於いて国中を南北に縦断してゐた交通線は四つあつた。これを東から数へると、所謂山辺道・上つ道・中つ道・下つ道の順であるが、山辺道は国中の東を限つてゐる春日断層崖の山裾近くの間を縫つてをり、上つ道は山辺道の西側——断層崖の山麓近くを走つてゐる。中つ道と下つ道とが国中の平坦部を北走してゐるが、下つ道は大和条里の中心線で路東路西両条里の基点となつてゐることと後の平城宮の朱雀大路がこの延長線上に設けられてゐることを注意しておかう。

この四つの交通線のうちで最も古くから利用されてゐたのは山辺道であらうが、それが他の三つの交通線と交替するやうになつた時期が何時頃であつたか今となつては判然としない。下つ道が聖德太子の頃に開かれたとの伝説があるので、一応、その頃と看做してよいであらうが、これらの交通線の存在が確認出来るのは紀に見えてゐる壬申の乱に於ける吉野の留守軍と近江側の別動隊との間に交された飛鳥の攻防戦に関する記事のなかである。それ故、尠くとも、壬申の乱の頃にはこれら三つの交通線は実用化してゐたとしなければならぬ。

先の山辺道といひ、これら三つの交通線といひ、その凡ては佐保から佐紀に亘る佐紀丘陵に到つて終つてゐる。そして、そのさして高くない佐紀丘陵を奈良坂越か歌姫越かによつて越えれば、そこは山背国の岡田である。

勿論、この佐紀丘陵は広義の奈良の地域に属してゐて飛鳥と国中

の南北に相隔つてはゐるものの、飛鳥人にとつて満更無縁の土地とは言へなかるう。といふのは、飛鳥人がその郷土の北の方にある耳梨山の北側に立つた場合、一望の平野の涯に佐紀丘陵を望むことが出来るからである。従つて、飛鳥人は佐紀丘陵を以て自分たちの領域の北限と看做してゐたらうし、或ひは更に丘陵の北方に憧れを抱いてゐたかも知れない。まして、奈良の土地に古くから住みつてゐた奈良人は、この丘陵の彼方に展開してゐる土地——山背を、文字通り「ヤマウシロ」の国——の実体を知つてゐて親近感を抱いてゐたであらう。

四

大倭から言へば、国中の北を限つてゐる佐紀丘陵の彼方の国である山背の国の状態はどうであつたらうか。

最近の激しい市町村の合併でひどく變つてしまつたが、元來、山背の国には八郡あつた。その最も大倭に近いのは相楽郡であり、その北方に綴喜・久世の二郡が南から北へと並んでゐた。そして、久世の東部の北方に宇治郡が、中央部の北方に紀伊郡が、西部の北方に乙訓郡が並び、乙訓・紀伊二郡の北方に西の方から葛野・愛宕の二郡があつた。

次に、この山背の国の水系を見るに、先づ目につくのは旧巨掠池の存在で、久世・宇治・紀伊三郡が境を接してゐる辺りに満々たる水を湛えてゐた。そして、悠遠な古へに水を湛えてゐた山城盆地の湖水の名残りと言はれるこの巨掠池へは、南から相楽・綴喜・久世等の諸郡を潤してゐる山城川即ち木津川が、東からは久世・宇治二郡の境をなしつつ西流する宇治川が、東北からは宇治郡の西辺を南

下する山科川が注いでゐた。仮にこれを山背川系統と呼ぶなら、今一つ葛野川即ち桂川水系がある。その葛野川は葛野郡の西部を南下してゐるが、愛宕郡から東南流してくる賀茂・高野の両川がやがて葛野、紀伊二郡を掠めて流れてくるのと合流して、乙訓郡の東辺を南下してゐる。そして、巨掠池から流れ出てくる水流と合流して、淀川となつて大阪湾へ注いでゐる。

これらの水系に対して山系はどうかといふに、先づ大倭に近い方面から見てゆくなら、山背川沿岸の山々がある。即ち、山背川が東西へ流れてゐる辺りでは笠置山脈がその南北を擁してをり、且つ、山背川が北へと方向を転じてゆく辺りには佐紀丘陵があつて大倭・山背の国境を劃してゐる。南より北へ転じてしまふと、東側には笠置山脈の北半が、西側には生駒山脈が山背川と競争するやうに北へとつづいてゐる。後者は淀川の畔でつきてゐるが、前者は宇治川をさし挟んで、更に北へ延びて行つて果ては比叡山塊となつてゐる。又、その比叡山塊の一支脈は東山丘陵となり桃山丘陵となつて巨掠池の北畔に達してゐる。これらの比叡山塊の一支脈に相対抗するかのやうに西方に連亘してゐる西山山塊は南へ延びて淀川に達し、山崎隘路によつて、生駒山脈の北端の男山丘陵と向き合つてゐる。そして、東山・西山の両山系を結ぶかのやうに遠く丹波より南下して来る北山山塊がある。この三つの山系——東山・北山・西山に囲まれ、南を巨掠池に限られてゐる盆地を山城盆地と呼ぶなら、東山丘陵の東方——笠置山脈の北端部の西方で、これ亦巨掠池に西南部を限られてゐる小盆地を山科盆地と呼び得るであらう。従つて、山背の地形を一口に言ふなら、この二つの盆地と山背川沿岸の狭長な平野地方とに三分出来るであらう。

巨掠池を中に挟んでゐることとて、葛野川の水系に属してゐる北部の山城盆地と山背川の水系に属してゐる南部の平野とは、古代に於いては別個の文化圏を形成してゐたと思はれる。それに加へて、強ひて区別するなら、宇治川をなかに挟んでゐることとて、山科川が潤してゐる山科盆地も南部の平野とは別天地を形づくつてゐたかも知れない。が、人間の交流には宇治川はさして障害となるほどでもなかつたらうから、山科盆地は南部の平野地方と早く交渉を持つたことであらう。

五

同じく奈良時代の初頭に成立した古事記・日本書紀でもその志向するところの異つてゐることは既に多くの人によつて説かれてゐる。即ち記は天武天皇の御代に稗田阿礼の口誦したものを元明天皇の御代に到つて太安厩が文字に移したものである故、古代人の思想なり感情なりが表現されてゐると言へよう。又、一方、紀は元正天皇の御代に撰述された官撰の歴史書である故、奈良時代初頭の官僚意識が濃厚に表現されてゐると言へよう。一応、記紀の性質をこのやうに局限して考へて見ようと思ふが、もしこの観点が許されるなら、記は飛鳥人の感情を伝へたものと言へようし、紀は奈良に移つて来た飛鳥人の感情が流れてゐると言へないだらうか。このやうに考へて来た場合、記なり紀なりに取扱はれてゐる山背はどのやうな觀念を持つてゐたであらうか。

本来ならば前に考へておくべきであつたのに、不用意にも触れないでしまつた山背といふ地名について、ここで触れておかう。これまで使用してきた山背といふ文字は、勿論行政上の国の名としてで

あつた。さりながら、山背といふ文字は最初から国名として使用されたのではなく、一局部の地名としてであつた。といふのは、仁徳記に見えてゐる磐之媛に関する記事のなかに山代川——仁徳紀では山背川——が、木津川の古名であることからこのやうに考えられるのである。即ち、日本古典文学大系本の注釈はこの山代川に對て「今の淀川である。上流は木津川」と言つてゐるが、淀川が山背國を流れるのはほんの僅かで大部分は河内と摂津の國境を流れてゐるのであるから、淀川が何としても山背川と呼ばれるいはれはない。かの葛野川が葛野地方を流れてゐるためにこの名を以て呼ばれてゐる如く、山背と呼ばれてゐる地方を流れてゐるために山背川との名を得たと解する方が單に山背國を流れてゐるからとするよりは合理的であらう。即ち、前に一言触れておいた如く、古来から奈良に住みついてゐた人々が佐紀丘陵の後背地——北方の土地に對して「ヤマウシロ」即ち山背と呼んでゐたとすると、仁徳記の山背川も、奈良人のいふ「ヤマウシロ」地方を流れてゐた川といふ意味に解することが出来よう。もしこのやうな解釈が許されるなら、山背川は相楽地方を流れてゐた川となるであらう。又、一方、古くは木津川の流路が現在のと違つて、綴喜郡田辺町より八幡町へは向はず、真北に万葉集の所謂名木河によつて巨掠池へ注いでゐたと思はれるので、山背川の經由するのは相楽・綴喜・久世等の諸郡であつたらう。それ故、記のいふ山背川も巨掠池より南の方——嚴密に言へば、名木川と名を換へるまでの上流を呼ぶ名ではなかつたらうか。この山背川の經由してゐる土地から判断するに、山背といふ地名は相楽郡より久世郡に至るまでの大地名として使用されてゐたと思はれるが、その当初は佐紀丘陵の後背地——恐らく木津附近——に對して

古くから奈良に住みついてゐた人々によつて名付けられた小地名が、飛鳥人によつて承認され、やがて時のたつにつれて相楽郡全体に拡大され、更に漸次北方へ及ぼされて行つて大地名となつたのはなからうか。

六

記の武埴安彦の叛乱に関する記事のなかには、挑河（和訶羅河）、波布理會能・屎禪（久須婆）等についての地名伝説が記されてゐるが、その各々は泉河（木津川）・祝園・楠葉に該当するが、前二者は相楽郡の地内、後者は河内国交野郡の地内に該当してゐる。又、大山守の叛乱に関する記事のなかに訶和羅の前まへについての地名伝説が見えてゐるが、この訶和羅の前については文学大系本の註釈には「山城国綴喜郡河原村の地」と注意してゐる。更に仁徳天皇皇后磐之媛の嫉妬に関する記事のなかには筒木の宮の名が出てくるが、その伝説地が綴喜郡普賢寺村多々羅部落（現田辺町）附近に伝へられてゐる。飛んで雄略記を開くと、市辺王の両王子（意祁王・遠祁王）が父王の殺された後に難を避けられたが、そのことを記した一節に刈羽井の名が出てゐる。刈羽井即ち山城国綴喜郡樺井と文学大系本は註釈を加へてゐるが、樺井は相楽郡棚倉村綺田（現山城町）の地に相当する。

綴喜郡の北は久世郡であるが、久世郡の名を冠した記事は記には一個条も見えないが、久世・宇治兩郡の境となつてゐた宇治川に関する記事は、例の大山守の叛乱を記してゐる記事のなかに、宇治川・宇治の渡の名が見えてゐる。この両者については特に註記する必要もなからう。又、考へるに、この二つの名称は或ひは宇治郡に係

けてもよいであらう。尚、宇治郡と言へば、紀には宇遲野・木幡村の名が見えてゐるが、前者は宇治より木幡に到る原野の名と解すればよからうし、後者は宇治郡木幡村（現宇治市木幡町）と解すべきである。

宇治郡の西につづく紀伊郡、及びその北方の愛宕郡については特に記すべき地名はないが、強ひて挙げれば孝昭天皇の皇胤を記したなかに、天押帶曰子命の分註として、栗田臣といふ氏族名が見えてゐることであるが、この栗田臣を採り上げれば、栗田臣とは愛宕郡栗田の地に因んだ氏族名となるであらう。愛宕郡の西方の葛野郡については、応神記のなかに葛野とあり、開化天皇の皇胤を記したなかに遠本邪王の分註として葛野別があり、大山咋神に関する記事のなかに葛野の松尾とあるだけである。松尾は松尾神社の謂である。又、乙訓郡についても、建須佐之男神の孫白日神が或ひは向日神の誤でないかとして、この神を乙訓郡向神社に當てる説があるだけで、特に記された地名は見えない。

紀の方は如何といふに、記に見えてゐる地名伝説はそのまま載せられてゐるが、それ以外のものとして、一二記に見えない記事が見えてゐる。先づ相楽郡に関するものは欽明天皇の廿六年の条の「山村高麗人」と、卅一年の条の高麗人を山背高たか城館に迎へ相楽館に饗したとの記事が見えてゐるが、文学大系本の註釈は前者に対してはその地が詳でないとしてゐるし、後者に対しては高城館を「古蹟仕上狛村」との山城志の説を引き、相楽館を高城館と同所としてゐる。綴喜郡に関する記事として付け加へるべきものは、継体天皇が山代筒城宮に遷都されたこと、例の欽明天皇の廿六年の条の「奈羅」とあるのと二個条ある。文学大系本の註釈は前者については「自

多羅村に至る水取村「地名尚存」を引いてゐる。後者については「抄に久世郡那羅郷あり（今綴喜郡那々城村）」と言つてゐる。久世郡に関する記事としては、例の欽明天皇廿六年の条の「畝原奈羅」があるだけであるが、前者については文学大系本の註釈は未詳としてゐるし、後者については綴喜郡のところで触れておいた。次いで宇治郡であるが、仁徳天皇の条に見えてゐる宇治稚郎子の菟道に宮室を営まれ、菟道山上に葬られたことを記してゐる記事と、天智天皇十年の条に見えてゐる「皇太子大海人皇子吉野に入る。大臣等菟道まで送る」との記事と、天武天皇元年の条の「菟道橋守」に関する記事があるだけである。

紀伊郡については欽明天皇の条に見えてゐる秦大津父の出身のこゝとを記した記事のなかに「山背国紀伊郡深草里」とあるのと、皇極天皇二年の条に見えてゐる山背大兄王の最期に関する記事のなかに「深草屯倉」とあるのと二個条が拾える。いふところの深草里は倭名抄の深草郷で今京都市伏見区に属してゐる。深草屯倉もこの郷内にあつたのであらう。愛宕・葛野二郡については特に付け加へる記事は見られないが、乙訓郡については継体天皇の十二年の条の「遷都弟国」との一個条があるが、弟国宮については文学大系本は何の注意もしてゐない。

七

以上のやうにして記・紀に見えてゐる山背国の地名を見たが、これを通観して見ると、これらの地名が臚げながら、二つの系統に分けられることが感じられた。それを考えるに當つて、先に垂仁記に見えてゐる円野比売命に関する一条に触れるべくしてその機会を失

つたので、ここで触れておかう。即ち、その一条といふのは、醜さの故に天皇の寵を得られなかつたことを恥ぢた円野比売命が相楽に到つて樹の枝に取りかかつて死なうとしたのでそこを懸木と名付けたといひ、弟国で淵に墮ちて死んだのでそこを墮国といつたといふ相楽・乙訓の地名伝説である。

二つの系統と言つたが、いづれもその起点を相楽に置いてゐる。いふところの相楽とは文学大系本の註釈を俟つまでもなく相楽郡相楽郷で、現在の木津町相楽であつて、木津町木津の西方に當つてゐる。

その相楽を出発して木津川——山背川の左岸をたどるなら、

相楽——祝園——綴喜宮（田辺）——楠葉といふ一つの交通線と、右岸をたどつてゆく、

相楽——樺井——宇治——木幡

といふ他の交通線といふ二本である。そして、飛鳥に都があつた頃には、前者の交通線がその志すところは丹波であり、後者の志すところは近江である。更にこれを延長して考えるなら、前者では山陰道、後者では北陸道が視野に入つてくるであらう。尤も前者の場合には楠葉で淀川を渡つて乙訓、葛野の二郡を経由して丹波へ入つたことであらうが、記の記事面から察するに、飛鳥人——引いてはその頃の奈良人——の親近感の後者の方ではなかつたらうか。よし、早くから紀伊郡に深草屯倉が設けられてゐたにせよ、それは交通線から遙かに離れた土地に存在してゐたので、応神天皇が宇遲野から葛野を遠望されるやうなことが実際にあつたに似たところで、宇遲野に対するほどの親近感を葛野に対して持つてゐられたとは到底考えられない。宇遲野で国讃めの歌として「千葉の葛野を見れば百千足

る家庭も見ゆ国の秀も見ゆ」と歌はれてゐても、ここには親近感は見られないで、発見の驚異感が伺はれる。却つて、木幡で歌はれた長歌の冒頭の「この蟹や何処の蟹 百伝ふ角鹿の蟹」の方に角鹿といふ土地に対して親近感が籠められてゐるではないか。角鹿といへば近江より北陸道へ入つて最初に接する日本海の港である。従つて、角鹿に対する親近感には近江への親近感が媒介として存在してゐなければならぬ。近江への親近感には山背川右岸の土地への親近感が先立つてゐたであらう。尤もこのやうな親近感は飛鳥人が古来から持ち合せてゐたかどうかについては俄に決められないが、或ひは古来の奈良人の親近感によつて培れたものかも知れない。それにしても国中の南端に多年居を構へてゐた飛鳥人が、その本心はともかくとして天智天皇の近江奠都と共に遠く近江の滋賀大津京へ移り得たのもこの親近感が大いに作用してはゐなかつたらうか。

それはともかくとして、偶然伝えられて来たと云へばそれまでであるが、記の記事のなかに第一の系統に属する記事は山背川の左岸から楠葉まで、それより先の山城盆地方面の記事が稀なのに対して、第二の系統に属する記事は、山背川の右岸でつきても宇治川に及び更に山科川附近にまでとどいてゐることを何と解釈したらよいのであらうか。思ふにこれは飛鳥人の親近感の方向が山背川の右岸の方により強かつたからではなからうか。或ひはまた古来の交通線が山陰道に到るものよりも北陸道に到るものの方が何らかの意味で重要視され、関心が多くその方向に向けられてゐたからであらうか。

このやうに視野を遠くに拡げて推論を述べてゐても際限がないので、視野を縮めて山背川の沿岸へまで南下して考えて見よう。本来

この地方に対する親近感は古来からの奈良人は当然持つてゐた筈であるが、前にも述べたやうに、当初は相楽地方だけであつたものが、次第に北へと延びて行つて、綴喜・久世の地方へ及んだと思はれるが、それが単に地縁によるだけであつたかそれとも血縁も加つてゐたかについては今は何とも言へない。それには古来の氏族の分布も考へて見なければならぬからである。もし、地縁だけでなく血縁も加つてこのやうな親近感が持たれてゐたとすると、言語の点でも、奈良人は山背人と異和を感じなかつたであらう。そして、そこにかもし出される方言は或ひは奈良人と山背人とは一つの共同体を作り上げてゐたであらう。いはば奈良・山背方言と言ふべきものがかもし出されてゐたとしても、その方言は飛鳥人の方言と全く一致してゐないにもせよ、奈良人の言語を媒介として飛鳥人にさほど理解し難いものではなかつたらう。それに反して、巨掠池及びそれより流れ出て桂川の末に入る流れといふ障害物によつて山背川沿岸と隔てられてゐる山城盆地の人々の持つ言語は全く理解し難いものではなかつたにもせよ、山背人・奈良人たちの方言とは異つた方言ではなかつたらうか。引いては飛鳥人にとつても理解の点では山背人・奈良人と同じであつたらう。

飛鳥から奈良へ都へ移されたといふことを山背への親近感といふ点から眺めると、恐らく飛鳥人も奈良人との同化の程度が進むにつれて、山背への理解も段々に深まつて行つたことであらうから、それにつれて、親近感も単に山背川の沿岸にとどまらず、山城盆地の方面へも延びて行つたことだらう。そのことは、飛鳥から奈良へ遷都されるに際しての異和感がさして感ぜられなかつたこと以上に、長岡なり平安なりへの遷都の際にも見られるのではなからうか。そ

れにはまだ七十余年といふ長い歳月が必要であり、飛鳥人が全く奈良人として古来からの奈良人と同化してしまうことが必要である。

八

筆の走るままに記して来たので、考証を願いた推論のみになつてしまつたが、要するに、飛鳥人は奈良人を媒介として山背の土地に親近感を持ち、それが延長されて北陸道へ向ふ方面の土地に親近感を持つやうになつた反面、山陰道へ向ふ方面の土地——殊に山城盆地方面へは関心が薄かつたやうに思えることを言ひたかつたのである。そして、大胆な推測を加へるなら、飛鳥方言と奈良方言乃至山背方言との相違の程度は後者と山城盆地の方言との相違ほど大きくなかつたことを言ひたかつたのである。そして、この三つの方言のうちで、最後に勝つたものが平安寛都による山城盆地の方言であつて、同じく上方にあつて京都方言が代表的なものの感がすることをも考へて見ようとしたのである。が、紙数が尽きたので、京都方言へまで筆を及ぼすに到らなかつた。が、それは他日の問題として、この辺りで筆を擱くことにしよう。

—一九六五・九・一〇—

古 代 文 学 4

上代古典における問題点

風土記における問題点

日本漢文の和呉について

懷風藻における問題点

日本書紀における問題点

「庚申の年」について

共同研究・古代文学存疑

市村 宏・江野沢淑子・大久間喜一郎・大谷 義博

尾崎 暢然・長田 貞雄・賀 古 明・清水 一 茂

田中 貞三・露木 悟義・戸谷 高明・中西 進

論 考

靈異記における夢

「衣かせ山」考

人麻呂時代と漢詩文の趨勢

由阿の万葉学

上代における否定表現の一特質

大久保 正

魚 返 善 雄

小 島 憲 之

西 宮 一 民

吉 永 登

緒 方 惟 精

佐 伯 仁 三 郎

橋 本 達 雄

前 野 貞 男

山 崎 正 之